

自ら学ぶ意欲を育成するコミュニケーション活動の 指導の在り方についての考察

—「オーラル・コミュニケーションA」を中心に—

清 重 安 男

はじめに

外国語科においては、コミュニケーション能力を育成し、国際理解の基礎を培うことを重視するという観点から、各教科の目標が決められている。この内容は①外国語を理解し、外国語で表現する能力を養うこと、②外国語で積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育てること、③言語や文化に対する関心を高め、国際理解を深めること、の三つの要素から成り立っている。この目標を踏まえて、コミュニケーション能力の育成という観点から、外国語教育、とくに、英語教育が現在抱えている課題や、これからの英語教育に求められている教育活動は何かを分析し、「自ら学ぶ意欲を育てるコミュニケーション活動の指導の在り方」について、「オーラル・コミュニケーションA」を中心に考察した。

1 高等学校における英語教育の現状と課題

(1) 大学入試

これまで高等学校で行われている英語の授業は、大学入試に合わせた、文法、訳読中心の指導が主で、「聞くこと」「話すこと」の指導に置かれている比重は極めて小さい。そのため、日本の英語教育は実際の英語運用能力の向上にはあまり役に立っていないのではないかと、この指摘を受けてきた。『わが国の英語教育に関する実態と将来像の総合的研究』の調査報告書によると、英語Ⅱの授業において、「文法・構文」「内容理解」「英文和訳」に重点をおいていると回答した教員は、78.3%いる。また高校時代に受けたリーダーの授業で、最も重点が置かれていた内容について、「日本語に訳す」「文法・構文・語法など」と回答した大学生は、合わせて78.3%と、教員側の回答と一致している。一方、英語Ⅱの授業で、「聞くこと・話すこと」に重点を置いていると回答した教員は、わずか2.8%にとどまっている。さらに、「読むこと」「書くこと」「聞くこと」「話すこと」の4技能を、総合的に指導していると回答した教員は、わずか28.4%に過ぎない。日本の英語教育は、文法偏重の「詰め込み教育」との厳しい批判を受けて久しいが、その一因として、ますます過熱化する受験競争をあげる教員も多い。このことは、受験の影響が「かなりある」と「大いにある」を合わせて66.5%の教員が回答していることから分かる。一方、大学側の入試改革も徐々にではあるが進行しており、積極的に聞き取りテストを取り入れるなど、新しい試みを導入する大学も増えている。従来指

摘されてきた、断片的な知識を要求する出題傾向もかなり改善されてきた。しかし、その一方で55%の教員が、英語教育は「全く（あまり）改善されていない」と回答している実態がある。

また、『職業人から見た英語教育に関する実態と将来像の総合的研究』では、日本の中学校、高等学校、大学の英語教育は、「全く成果をあげていない」、「あまりあげていない」と答えたものは合わせると、74.9%を占めている。さらに、成果のあがらない理由として、60.5%のものが、「受験でゆがめられている」と回答している。これは教員の見方とほぼ一致している。

しかし、成果のあがらない理由として、「教え方がよくない」(42.0%)と「教師の質が問題である」(41.0%)が2位と3位を占めていることから、英語教育に対する不満が読み取れる。生徒の価値観の多様化に対応しきれず、生徒の個性を無視した、教員の一方的な知識伝達中心の授業が、依然として改善されていない英語教育の現状が、浮き彫りにされているといえよう。

(2) コミュニケーションに対する日本的な態度

聖徳太子による「和をもって貴しとなす」の精神が日本文化の主流となって以来、四方を海に囲まれた地理的条件や約200年にわたる鎖国政策などにより、同質性の高い文化的基盤が出来上がった。この結果、「以心伝心」の言葉に代表される、言語を省略する日本的なコミュニケーションが尊重されるようになった。こうした日本特有のコミュニケーションは現在でも日本の社会の中で重要な役割を果たしている。このような国民性から日本の教育では自分の意思を積極的に伝えるコミュニケーション能力の育成は、これまであまり重要視されなかった。しかし国際化の急速な進展により、日本は国際社会の中で国際社会の一員としての自覚と責任感を持って、積極的にコミュニケーションを図ることが求められるようになった。

このような観点から、現行の学習指導要領では英語によるコミュニケーション能力の育成を、英語教育の重要な目標の一つに挙げている。この目標を達成するために、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を、日常の教育活動の中でどのようにして育成していくかが英語教育の大きな課題になっている。

(3) 「受信型」の外国語教育

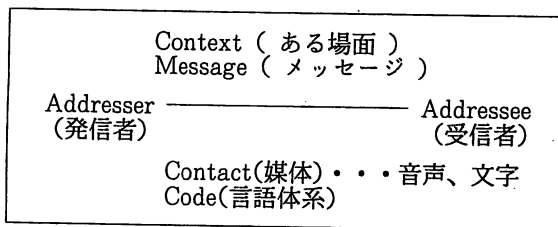
日本では、人々は外国語を通して諸外国の文化、歴史、風俗習慣などの知識を熱心に吸収してきた。しかし、一方的に知識を吸収するだけで、自分から積極的

に情報を発信しようとしなかった。このような傾向は英語教育においても見られ、訳読中心の、知識を吸収するための教育が中心となり、「話す・聞く」などの英語運用能力は軽視された。このため日本に関する情報不足と、日本のコミュニケーションに対する誤った先入観などにより、国際社会で日本が誤解を受けることも多かった。しかしその場合でも日本は積極的に反論しなかったし、また外国語によるコミュニケーション能力が乏しかったために反論もできなかった。

しかし、これからの国際社会を生きていくために、お互いの言語や文化を理解し、英語で積極的にコミュニケーションを図る「発信型」の英語教育への転換を図ることが課題となっている。

3 コミュニケーション — その意味と機能

コミュニケーション (communication) の語源はラテン語の communis (共通な)、communicatus (他人と交換しあう) であり、相互に「共通なもの(伝達内容)」を話し手と聞き手が「分ち合う」(share) 行為を意味する。Jakobson (1960) は次の図でコミュニケーションの機能を説明している。



ある場面(Context)で、発信者の考えや感情は、発信者に内在する言語体系(Code)によって、一定の形式を持ったメッセージ(Message)となり、音声あるいは文字という媒体(Contact)に乗って受信者に伝わる。受信者は発信者と共有する場面にあつて、伝達されたメッセージを言語体系に照らし合わせ、それを解釈したり、理解したりする。

コミュニケーションは言語を使う(verbal)要素と言語を使わない(non-verbal)要素から成り立っている。コミュニケーション能力の育成を図ろうとする時、伝達される言語メッセージに加えて、身体の動作、顔の表情などの非言語的(paralinguistic)要素も言語活動の指導の中に含まなければならない。non-verbalなコミュニケーションは、言語が使われているそれぞれの国の文化と密接に関連しており、ほとんど無意識に行われる。そのため「初歩的な英語の学習を通して、言語とその背景にあるものの考え方や文化などを理解し、知識を身につけ」させる指導が必要となる。

4 コミュニケーション活動の効果的な指導について

(1) 興味を持続させる言語活動めざして

「オーラル・コミュニケーションA」の科目の目標は、「身近な日常生活の場面で相手の意向などを聞き

取り、自分の考えなどを英語で話す能力を養うとともに、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育てる」となっている。この目標を達成するためには、生徒に積極的に話そうという意欲を持たせ、話す機会をできるだけ多く与える必要がある。教員は常に生徒に働きかけ、生徒に発表(発言)したいという意欲を持たせるよう指導する。生徒の興味・関心を持続させるために、教員は生徒の努力を認め、個性を重視し、絶えず激励しながら生徒が言語活動に積極的に参加できるような雰囲気作りをする。また生徒の意欲・態度を正当に評価することにより成就感を持たせる。教員は授業の中で一人一人の生徒の学習の状態(つまずきの箇所、伸びている点、平素の学習態度、活動への参加意欲等)について個々のカルテを作り、タイミングよく指導できるようにしておく。また言語活動に応じて小道具などを用意し、コミュニケーション活動がしやすい状況設定をする。生徒が関心をもっている身近な話題を取り上げたり、グループ(ペア)ワークを効果的に取り入れて、生徒のコミュニケーション活動を活発にさせる。このような活動中心の学習では、到達目標を個人差に応じて変えることも考えなければならない。

個々の生徒のカルテを作成し、個別に目標を与えるのが理想であるが、現在のクラスサイズを考えると難しい実態がある。その場合、生徒の習熟度に応じたクラスを編制したり、授業の中でクラスをいくつかのグループに分け、それぞれのグループについて学習診断表を作成する方法が考えられる。習熟度別クラスではできるだけ生徒の学力が均質のクラス編制をし、クラス全体に共通の到達目標を設定する。またグループごとの学習診断表には欠席・遅刻数、レポートの提出状況、発表回数などの態度的側面と小テストやレポートの評価など認知的な側面を入れ、その診断表を基にグループごとの到達目標を設定する。いずれの方法においても、教員は常に全員の生徒が活動に参加しているかどうかチェックし、活動に消極的な生徒には個別指導をするなど、クラス全体のレベルの向上を図るよう留意しなければならない。

(2) 教室内の生徒間のコミュニケーションの奨励

生徒間のコミュニケーションを活発にするために、教員は活動の到達目標を生徒に明確に示さなければならない。生徒自身が、到達目標に向けて自主的に活動できるよう指導する。グループ活動の中ではリーダーを固定せず、すべての生徒にリーダーの役割を分担させ、グループの一員としての自覚を持たせることが大切である。またコミュニケーション活動の内容に応じて一斉指導、グループによる指導、個別指導等、効果の上がる学習指導の形態を考える。

グループ活動は次のような点に留意して指導する。

- ① 全員の生徒が積極的に参加しているか。
- ② 日本語を使っていないか(雑談していないか)。

- ③ 教科書の表現を積極的に使っているか。
- ④ non-verbalなシグナルを用いているか。
- ⑤ 正しい発音（イントネーションやリズム）をしているか。

積極的なコミュニケーション活動を喚起するためには、生徒の中の、英語に対する過度の緊張感や不安（心理的障害）を、できるだけ少なくする必要がある。生徒の言語活動の様子を見ながら、活動の内容に応じて、すべての生徒が均等に番を出番を与えられるよう工夫する。グループ（ペア）ワークを効率的に取り入れ、生徒間のコミュニケーション活動にできるだけ時間をかけ、リラックスした雰囲気の中で活動に参加できるように配慮することが大切である。

(3) 外国人外国語指導助手（ALT）の活用

現在118名のALT(Assistant Language Teacher)が県下の高等学校に配置されている(平成6年9月)。将来的には150名程度まで増える見込みである。この数字はほぼ1校に一人のALTが配置されることを表している。

しかし、ALTを授業の中で活用することに消極的な英語教員がいることも事実である。その理由として、校務が忙しくて授業の事前の打ち合わせが十分できない、ゲームばかりやって教科書の進度が遅れる、事前の打ち合わせ通りやってくれない等がある。ここで問題になるのは、ALTの職場での人間関係である。普段から同じ職場の一員として、望ましい人間関係が出来ているかどうかで、協同授業の在り方も変わるからである。英語教員は自分の教育理念をしっかりとALTに伝え、協同授業の中でALTをうまく活用していく方法を考えるべきである。協同授業の中のお互いの役割を明確にし、ALTに英語教員が何を求めているのか、はっきりと伝えていく必要がある。協同授業は、互いの存在価値を認め合うことで成り立っているし、ALTと議論することで、教員自身の言語運用能力を高める訓練にもなる。

また、英語教員の苦手な分野に、non-verbalなコミュニケーションの指導があるが、この場合にもALTの活用が必要とされる。言語と文化は密接な相互関係にあるので、ALTによる文化の紹介などを通して、生徒は「言語とその背景にあるものの考え方や文化などを理解し、知識を身につける」とともに、異文化によるコミュニケーションについて学ぶ。生徒はALTとの関わりの中で、英語圏の文化に特有の、非言語的なコミュニケーションについて学ぶことができる。

さらに、コミュニケーション活動への動機づけとして、生徒をALTと自由に英語で話させるのも、一つの方法である。英語教員相手では緊張してしまう生徒も、ALTとは気楽に話ができる。しかも、ALTに英語が通じたという成就感を持つことで、さらにコミュニケーション活動に意欲をもつようになる。コミュニケーション能力の育成に、ALTの果たす役割には、

大きな期待がかけられている。

5 コミュニケーション活動に求められる英語

「オーラル・コミュニケーションA」の目標は、「積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育てる」ということであるが、実際の授業ではどのように指導すればよいのか。Brown and Yule (1983)の観点から考えていきたい。

(1) 「授業で生徒にどのような英語を教えたらよいか」

「オーラル・コミュニケーションA」の内容には、「平易な表現で自分の考えなどを相手に話すこと」とある。「平易な表現」とは、「中学校レベルの英語を使った表現」と解釈できる。したがって、高度な文法事項や難解な言い回しは必要でなく、今まで「知識」として蓄積してきた英語を、「生きた英語」として使う過程が重視される。「オーラル・コミュニケーションA」では、あらゆる手段を講じて相手と意思の疎通を図ろうとする態度を育成するのである。このため、目標言語としての英語そのものについては「surviveすることがゴールなのだから、意思の疎通が成功したか否かが判断の第一の基準であって、発音や文法の正確さは二次的なものになる。相手の感情を害したり理解に苦勞をかけない範囲であれば、日本的なアクセントや、文法的な誤りは許されるのである。」¹⁾とする意見もある。

英語の授業の中で、生徒が誤りをおかすことを恐れず、堂々と自分のまとまった考えを話せるクラスの雰囲気を作り出すことが、コミュニケーション能力の育成にとって不可欠な要素であることは、すでに述べた通りである。しかし、生徒の誤りにあまり神経質になるのもよくないが、生徒が共通におかす文法的な誤りや、とても外国人が理解できそうもないカタカナ英語式の発音に対しては適切な矯正をしてやらなければならない。その際、生徒が自分の考えを積極的に発表しようとしている時には、なるべく中断しないように配慮してやる。多くの生徒に共通している誤りはノートにつけておき、少しあとでクラス全体の練習として提示する。生徒の誤りを指摘する時は、生徒がリラックスした雰囲気の中で、励ましてやる態度でのぞまなければならない。

(2) 「発音の面でどのようなモデルがふさわしいか」

ALTが授業に活用できる場合は、ALTが発音のモデルをさせる。ALTが活用できない場合には、テープレコーダやビデオ等の視聴覚教材を利用する。その場合でも、生徒の弱点により的確に対応するためには、英語教員がモデルを努めることが望ましい。できるだけ教材用のテープに近い発音ができるように練習を積み、肉声で生徒に発音練習をさせる方が効果大きい。また、教科書付属のテープの場合、テキストの読み方が単調であることが多く、生徒に感動を与える読み方はあまり期待できない。むしろ教員が感情を込めて読

んだ方が、生徒の印象に残る。日ごろから、視聴覚教材等を利用して英語特有の表現力を、身につけておくことが必要である。

(3) 「発音練習にどれくらい重きをおけばよいか」

生徒の中には、カタカナ英語式の発音をする生徒が多く、また教室の中では、照れくささから他の生徒の前で、英語特有の発音をまねずに、わざと日本語式の発音をすることがある。コミュニケーション活動では、相手と意思疎通をしようという態度を育成することが主な目的である。したがって、日本語と構造的に異なっている発音（基本的なもの）を教えるにとどめ、よく使う発音記号については、その都度、短時間で反復練習する方が効果的である。この場合も、発音記号そのものを教えるのではなく、音声から文字へ移行する過程として指導すべきである。発音練習は段階的に教える。単語の発音練習のほかに、自然なリズムやイントネーションの英語に慣れさせる。文字として既習の語であっても、その発音に習熟していないと、聞いてもその語であると判別できない。自然なリズムの英文では、音の弱化、音の脱落・消失、音の連結、音の同化等が生じる。発音指導において、英文のリズムとそれに伴う音変化に留意した指導を、継続的に行うことが必要である。

(4) 「話し言葉の指導方法はどうかあるべきか」

話し言葉と書き言葉では、その用途も目的も違う。それぞれの特徴をふまえて教えないといけない。たとえば、書き言葉では正確な文法の知識が要求されるが、話し言葉では非文法的な表現が多く現れる。また、話し言葉では「休止 (pause)」、「躊躇 (hesitation)」、「言い間違い (error)」、「訂正 (correction)」が頻繁に起きる（通常のスピーチでは30～50%がpause, hesitationで占められている）。話し言葉は書き言葉ほど事前の計画性がなく、話の展開も早い。このため、伝達内容が重複したり、省略されたりする。さらに大きな特徴として、話し言葉にはnon-verbalなシグナル（体の動かし方、声の調子、顔の表情、ジェスチャー等）が伴う。したがって、話し言葉はある設定された場面での、話し手と聞き手のinteractionを中心に教えないといけない。たとえば、「オーラル・コミュニケーションA」では、日常会話を言語活動の中心において授業の展開を図るわけであるから、会話特有の表現を学ぶだけでなく、verbal、non-verbal両面の言語的要素について学ぶことになる。

(5) 「英語を話すときには正しい文法を使うべきか」

新しく「オーラル・コミュニケーション」という科目が登場した背景には、「知識偏重」の教育に対する見直しがある。日本式教育に象徴される、「知識・理解」重視の考え方から、自ら学ぶ意欲を培い、生涯にわたって学習を継続するための基本的な資質を育成するという、「生涯学習社会」を見据えた考え方に移行しようとしている。もちろん教員は、文法的に正しい

英語を教えるよう努めなければならない。しかし、文法については、基礎・基本を生徒にしっかり理解させることに重点を置くべきである。中学校で学習する文法事項がきちんと理解できていれば十分である。できるだけ平易な表現を用いて、「生きた英語」を使えるよう指導する。「生きた英語を使う」とは、場面に応じた適切な表現内容を、相手に通じる英語で話す、ということである。文法的に不十分であっても、コミュニケーションに支障がなければ、十分その目的を果たしている。積極的にコミュニケーション活動に参加しようとする態度をもった生徒だけが、「生きた英語」を身につけることができるのである。コミュニケーション活動への取り組みを正当に評価し、激励しながら「生きた英語」を身につけるよう、段階的に指導していくことが望ましい。

(6) 「英語を話すのに、どうすれば生徒にとって意味のある練習をさせることができるか」

「オーラル・コミュニケーションA」は、生徒の言語活動を中心に展開される科目である。したがって、生徒の内に、コミュニケーションに不可欠な、「話したい（聞きたい）」という強い欲求が生まれなければ成立しない。この点で、従来のどの科目とも性質を異にしている。教員の教育的な働きかけがなければ、生徒のコミュニケーション活動は生まれてこない。教員は、生徒が積極的に「身近な事柄について場面の目的にふさわしい表現で話し合う」ことができるよう、実際のコミュニケーションの場面に近い内容を設定しなければならない。

Clark (1987) は次の7つの活動の型を提唱している。

- ① 他人との社会的なかかわりあいを通して問題解決を図ることができる。(例) 会話に加わる。会話や文通により情報を得る。他の人と取り決めをする。
- ② 情報や意見、感情などやりとりを通して人間関係を築き、その関係を保つ。
- ③ ある目的のために情報を探して検討し、実用に用いる。(例) A から B へ行くのに最も安上がりの方を探す。
- ④ 情報を聞いて検討し、実用に用いる。(例) ニュースを聞いて他の人と議論する。講演を聴いてメモを取る。
- ⑤ 個人的な体験を話したり、書いたりして情報を与える。(例) 話をする。レポートを書く。日記を書く。書類に必要事項を記入する。
- ⑥ 物語や詩などを聴いたり、読んで考察する。(例) 物語を読んでその内容について話し合う。
- ⑦ 創造力に富んだテキストを創る。

また Pattison (1987) は次のような活動の型を挙げている。

- ① 質疑応答 (Questions and Answers)

情報のギャップを利用した活動。Doughty と Pica

(1986)は庭作り(plant the garden)と呼ばれる活動を考案している。これは参加者が、お互いに相手の庭を見ないで、口頭で情報交換することにより、それぞれの未完成の庭(ボール紙に書いたもの)に植物を植えていき(紙の植物を貼って)、オリジナルの庭と同じ庭を完成する活動である。この活動では、双方向的な(two-way)情報のギャップを利用している。

② 対話やロール・プレイ(Dialogues and Role plays)

対話是用意された台本に基づいて行う方法と、その場で即席に台本を作って行う方法がある。道順を聞いたり、電話でやりとりをしたり、買い物やレストランでの食事等に使える。教科書の対話を暗記させて行うだけでなく、生徒自身にスキットを作らせて行うと、より生徒の興味を引きつけることができる。

ロール・プレイは、ある設定された場面でそれぞれの生徒が与えられた役割を、その人物になりきって演じる。教科書の既習のテキストをもとにして役割設定をすれば、内容理解を一層図ることができる。

③ 相手さがし(matching activities)

活動の中にゲーム的な要素が入ると、生徒は喜んで参加する。このゲームの形式としては「Bingo」「Happy families」「Split dialogues」などがある。

授業の中で、ゲームを言語訓練として利用する際の留意事項として、Dobson(1970)は次の点を挙げている。

- ア 授業の最初からゲームをしない。
- イ 全員にははっきりわかるように指示すること。
- ウ きめたルールをきちんと守ること。
- エ バランスのとれたチーム分けをしておくこと。
- オ 生徒がもう少しやりたいというところでやめること。
- カ 同じゲームを何度もしないこと。

④ コミュニケーションのための戦略(communication strategies)

コミュニケーションを円滑に進めるためには、様々な戦略が使われる。難しい単語を易しく言い換えたり、他の語を借りたり、新語を作ったり、身ぶりを使ったりするなど、相手との意志疎通を図るための戦略を身につけなければならない。

⑤ 絵を使った活動(Pictures and picture stories)

「Show and tell」もこの活動の一種である。ここでは絵を使ってコミュニケーション活動をさせる。2枚の絵の違いを探させたり(spot the difference)、1枚の絵をある一定時間見せ、その絵に描かれていたものを挙げさせたり(memory test)、絵を見て物語の筋にそって話しをさせる方法がある。

⑥ パズル(Puzzles and problems)

様々なパズルを解かせる。生徒は推測したり、一般常識や個人的な経験に頼ったり、想像力や推理力を働かせる。この活動には、生徒の知的レベルに合った問

題を提示できるメリットがある。

⑦ 話し合い(Discussions and decisions)

情報を集めて、グループの中で話し合わせ、結論を出させる。たとえば、あるグループがチャリティ・パーティーを開くことにした。そのパーティーに何をもち寄るか、誰が何の役割をするか、集まったお金はどうするか等についてアイデアを出し合い、一つの方向を決める。この活動は「オーラル・コミュニケーションC」の目標である、自己表現・主張の能力の育成に適している。

コミュニケーション活動で、とくに留意すべき点は、生徒が興味を持つ内容を取り上げ、生徒が実際に活動する場を多くするよう工夫することである。

6 「オーラル・コミュニケーションA」の教科書に見られるコミュニケーション活動

現在出版されている17種類の検定教科書で扱われている主な活動例を以下に挙げておく。

(1) 挨拶

① 「相手の様子を聞く」表現例

教室内に、できるだけ英語学習に自然な環境を作ることは、コミュニケーション活動を進めるのに不可欠である。自然な会話の訓練のために、失敗を恐れない、緊張感のない雰囲気の中で、自然に英語が使える工夫が要る。授業の初めに交わす英語による挨拶はIce-breaker(緊張をほぐすもの)として最適の活動である。挨拶の仕方には定型はなく、その場の雰囲気でも様々な表現方法がある。How are you? I'm fine, thank you.といった紋切り型からWhat's up? — Not bad. / Pretty good. のようにカジュアルな型まで様々な表現が見られる。

ここで留意したいことは、英語の挨拶にもTPOがある、ということだ。How are you? / How's your day been? / How's everything? 等は先生に使っても構わないが、What's up? / What's new? 等はややくだけすぎの感がある。しかし、当初は少々の不自然さには目をつぶって、発話をできるだけ制限しないよう配慮する必要がある。

② 返事・応答

上記の挨拶に対する教科書の応答例は以下の通りである。How are you? と同じ意味を持つ挨拶の種類は実に豊富であるが、その挨拶に対する受け答えも実に多い。Great. / Good. / Fine. / Not bad.

So so. (あまり native speaker は使わない。Not so / too bad. が自然) / I don't feel well. I'm not feeling well. (社交辞令の挨拶としては不適。親しい間柄ならよい) / Fine, thank you. / Just fine. / I'm OK, thanks. / Pretty good. / Very well. / OK.

(2) (自己)紹介

自己紹介や家族の紹介が一番身近な話題であり、自

分のことを伝えることにより、聞き手との間の心理的な距離を縮め、過度の緊張を解いてくれる。同時に相手のことを知るきっかけにもなり、相互理解の一步となる。この活動では、積極的に情報のギャップを利用したコミュニケーション活動を進めたい。

(3) 学校生活

生徒にとって、学校生活と家庭生活が「身近な日常生活の場面」のほとんどを占めるであろう。総体的に見て、「オーラル・コミュニケーションA」の内容の取り扱い、このようなごく日常的な生活の場面で、何とか耳と口による意志疎通が図られるよう、種々な話題を取り上げ、適当な表現を教え、バランスのとれた指導をするよう求めていると思われる。教科の目標にある、ごく身近な場面を使っての基本的な会話として、ほとんどすべての教科書が学校生活を取り上げているのは、上記の理由による。たとえば外国人への日本の学校の様子の説明、インタビュー形式での外国人学生による外国の学校生活の紹介、交換留学生による彼らの国の学校生活の紹介、外国で学ぶ日本人学生の目を通して見た外国の学校の様子、日本の学校と外国の学校との類似点や相違点等、様々な工夫のあとが見られる。最近、英語圏の国から、高校生が日本の学校に短期留学する国際交流事業が盛んになってきている。同じ年代の高校生であれば、興味や関心で共通点が多く、話題に困らない。このような機会を利用して、生徒のコミュニケーションに対する動機づけをすることができる。第二言語習得の過程で、目標言語の文化に対して適応性が高ければ高いほど、その言語の習得率が高いことを忘れてはならない。言語のみならず、その言語が用いられている国の文化に対する関心を高めるとともに、その文化を尊重する態度を育成することが重要である。教科書では学年(学期)、校舎の案内、科目、クラス、クラブ活動・課外活動、将来の夢(進路)、校則、授業・試験・宿題、学校行事等の項目が扱われている。

(4) 社会生活に関するトピック

① 道順を聞く

- ア 地図を参考にして道案内をする。
- イ 英語の指示に従って、地図中の目的地を探す。
- ウ 落とし物を拾った(落とした)場所の説明をする。
- エ (電話で)自分の家までの道順を英語で説明する。

② 電話を利用した活動

- ア 様々な設定(直接相手と話をする場合、留守の場合、伝言を伝えたい場合)の中での活動
- イ 外国人(留学生)からかかってきた電話を受ける。国際電話をかける。
- ウ (歯)医者に電話で予約をする。
- エ 相手の言ったことを聞き取り、メモをとり、内容の確認をする。

③ 買い物

ALTとスキットを生徒の前で演じる場面が多くな

るが、この場合、演じる側にかかなりの演技力が要求される。様々な設定の中で、トピックの主題に応じて適切な型や声の調子を選択する必要があるが、「表現力」が特に大きな要素を占める。高校生ともなると、照れたり体面を気にして、英語特有のジェスチャーを使いたがらないことがある。教員も無理に全員にさせようとせずに、表現の仕方に文化的な差異があることを理解させながら、生徒にスキットを発表させる。また、グループごとに発表させる。

ア ロールプレイ(客・店員)を楽しむ。活動に必要な小道具は、生徒が分担して用意する。

イ 予算内で買い物をする。アの活動の応用。事前の計画や英語による交渉力が必要となる。

ウ 誕生日(クリスマス)のプレゼントを買う。

その他のトピックとして、家庭生活、余暇の過ごし方、旅行、健康、食べ物、天候などが扱われている。

このような教科書の展開例は基本的な活動内容だけを扱っている。「自ら学ぶ意欲を育成するコミュニケーション活動」を推進するためには、既成の指導方法にとらわれない、自在な発想に基づく指導方法の研究が必要とされているのである。

おわりに

生徒主体のコミュニケーション活動を指導するうえで、どのような言語活動を展開していくべきなのか、またALTとの協同授業を含め「オーラル・コミュニケーションA」の授業をどう展開するのか論じてきたが、まだまだ指導方法には研究の余地が残っている。今後は、コミュニケーション活動に対する意欲や態度を、どのように評価するのかさらに研究を続けたい。他教科とも連携を図り、体系づけられた学習指導の中でどのようにコミュニケーション能力の育成を図るのか、英語教員自身の意識の変革が求められていることを忘れてはならない。

引用

1) 佐野正之 『オーラル・コミュニケーションAの指導に向けて』 英語教育7月号 大修館 1993

参考文献

- ・和田稔・小池生夫 『改訂 高等学校学習指導要領の展開』 明治図書 1990
- ・小池生夫 『わが国の英語教育に関する実態と将来像の総合的研究』 英語教育実態調査研究会 1990
- ・小池生夫 『職業人から見た英語教育に関する実態と将来像の総合的研究』 英語教育実態調査研究会 1990
- ・羽鳥博愛・松畑熙一 『学習者中心の英語教育』 大修館 1980
- ・垣田直巳 『授業に活かせる英語のゲーム』 大修館 1983
- ・Nunan, D 『Designing Tasks for the Communicative Classroom』 Cambridge University Press 1980.